

善通寺は古代より栄え、周囲には、多くの古墳が点在しています。中でも、宮が尾古墳は、その石室に細い線で刻まれた線刻画が有名で、教科書などにも写真付きでよく引用されています。

しかし、なんと言っても善通寺を有名にしたのは、弘法大師空海の誕生地であることです。空海は善通寺で生まれ、唐で密教を学び、帰国して真言宗を開きました。善通寺の名は、父親・善通（よしみち）を記念して創建されたものです。また四国八十八ヶ所霊場を定めたとも言われています。空海は、長安に滞在中、景教（シリア系キリスト教）に触れ、その影響を受けたと考えられています。真言宗の教えには、キリスト教と共通の教理があると言われています。

そんなわけで、さまざまな空海伝説があります。善通寺に「お杖の井戸」という古井戸があり、空海が杖を地に突き刺したところ、井戸が湧き出たということです。また、すぐ近くの我拝師山（がはいしさん）に出釈迦寺（しゅっしゃかじ）という寺があり、その開基には、空海幼少期の数ある伝説のひとつ「捨身（しゃしん）ヶ嶽（たけ）」縁起にゆかりがあります。それは、空海が真魚（まお）と呼ばれていた7歳の時。我拝師山に登り「私は将来仏門に入り、仏の教えを広めて多くの人を救いたい。私の願いが叶うなら釈迦如来よ、姿を現したまえ。もし叶わぬのなら一命を捨ててこの身を諸仏に捧げる」と、断崖絶壁から身を投じました。（ものすごい絶壁です）。すると、紫色の雲が湧き、釈迦如来と羽衣をまとった天女が舞い降り、雲の中で弘法大師を抱きとめました。命を救われ、願いが叶うことを示された弘法大師は、青年になって我拝師山の山頂で刻んで安置し、堂宇を建てたといわれています。イエス様の誘惑の記事に似ています。宗派の名が「真言宗」というのも、なんとなくヨハネの冒頭の言葉を思い起こさせます。今年2023年は、空海の生誕1250年に当たり、様々な記念行事が開かれております。善通寺（寺）の地下には、戒壇巡りがあります。全くの光のない世界です。左で壁を触りながら、入っていきますが、何も見えません。「全くの暗闇」とはどういうものかを伝えるために、時々、お客様を案内することがあります。ただ、左手の阿弥陀如来に頼って歩くという意味でしょう。

また明治になって、善通寺は、第11師団が置かれました。師団長は乃木希典大将でした。多くの若者が、ここで訓練を受け、ここから戦地に向かいました。四国学院の建物の中に、当時の兵舎があり、県の指定文化遺産として登録されています。善通寺の駅の入り口は、珍しいほど幅広い階段があり、ここで、彼らは整列して、人々は、出征する彼らを見送りました。師団がありましたが、ここに戦時中、捕虜収容所がありました。そのおかげで、空襲に遭わずに済んだと言われています。終戦後、その跡地の中の馬場のあった4万坪の土地を、米国南部長老教会が購入し、そこに建てられたのが、四国学院大学です。道を挟んで四国学院の昔の正門の前に、香川県護国寺があります。師団時代に建てられたものです。隣が乃木神社です。その跡地に警察予備隊、自衛隊が入り、今は、自衛隊の町になっています。そんなわけで、宗教的には、日本の縮図と言えるでしょうか。仏教の善通寺、神道の護国寺、そしてキリスト教の四国学院大学があります。人口3万5千の小さな市ですが、日本基督教団、改革派、カトリック、バプテスト、単立、韓国系と珍しく教会数が多い町でもあります。また国立病院、国立農事試験場などもあり、ある意味で文化都市でもあるかも知れません。来年は、善通寺市政70年になり、その行事も行われます。